

私はイギリスに行くことをあまり楽しみにしていなかった。

外国に行ったことがない私はホームステイよりも前にテロは大丈夫なのか、私の英語力で外国人に通じるのか、二週間も家から離れてホームシックにならないかなど日本を出ること自体に不安を感じ緊張しきっていた。

でもホストファミリーの家族構成が書かれた手紙を見て少し興奮した。私の初めてのホストファミリーになる人は Anthony, Lucie, 八歳の Luca, ミックス犬の Monty, 黒猫の Libby の五人家族だった。その手紙には家族の写真はなかったのでどんな人たちなのだろうと想像するだけで楽しみになっていた。お土産はどんなのが喜ばれるだろう、こんな日本のおもちゃとか喜んでくれるだろうか：そこまで多くなくても高くなくてもいいと事前に先生方から説明があったが、そんなこと関係なしに準備をするだけで楽しかった。

八月二日、日本を発つ日がやってきた。しかしその日車で羽田に向かった私は事故渋滞に巻き込まれ集合時間に遅れてしまった。集合時間一時間前、なかなか動かない車の中で私は先生に連絡をいれて一つ息をついた。

羽田空港に到着してからも一時間三十分くらい時間があってから飛行機に乗り込んだ。飛行機に乗るのは初めてではないがじつに三

年振りだ。十二時間三十分のフライト時間を映画や音楽を聴いて過ごし、初めての海外の地、イギリスについたのだった。

初日、二日目とまわったロンドンは「THE イギリス」と言った感じだった。日本人(私)が抱いているイギリスのイメージを良い意味で裏切らなかった。日本の中心、東京と違いバッキンガム宮殿、ビッグ・ベン：などなど歴史ある建物がイギリスの中心部には次々と立ち並んでいた。なんといっても衛兵交代は美しかった。太陽がサンサンと照りつける中、色々な国の人が集まり、今か今かと待ち構えている。すると盛大な音楽と共に一糸乱れぬ列を成して赤い夏用の衛服をまとった衛兵が行進してくるのだ。目の前を通り過ぎるのはたった二分くらいであったが圧巻だった。

こうしてロンドン観光を終えたが、人々が普通に暮らしている家々でさえ魅力溢れるものばかりで、バスの中からでも私のカメラのシャッターは切られ続けたのであった。

そしてロンドンからホストファミリーの待つチェルトナムに向かうバスの中でホームステイのペアと自分の心情や、会ったときまじりなんて言おうかなど話し合った。その時私は日本にいる時の自分とはまるっきり違って驚くほど緊張していなかった。一心に頭で思っていた。

言葉は違ってもみんな同じ人間、なんとかなるんじゃないか

と。しかし夜になってチェルトナムのディーンクローズスクールの沢山のホストファミリーが待つホールに足を踏み入れるとそうも思っていられなくなる。全然違う体格、肌・目の色。一瞬で頭の中が

真っ白になり、緊張して固くなった。いや、それを通り越して笑えてきてしまった。口元が緩みながら左目でチラッと座席の上の方を見上げると体格が良く、自分の指を絡ませて両肘を両足の上に置いてこちらを見ているお父さんと、髪の短いお母さん、赤い服をきた男の子の三人が目に入った。

「かっこいいなあ」

これが素直に感じたことだった。自分との違いに圧倒されたというか：ロンドンでも沢山の外国人は見たがそれよりも建築物の方に夢中だった私はここではじめて、左目でみたこの一秒のイギリス家族の静止画を今でも忘れられない。しかしこの美しい家族が自分のホストファミリーになるなんてこの時はまだ知りもしなかったのだ。

席について晃華の代表者の挨拶が終わるといよいよそれぞれのホストファミリーと対面だ。自分たちの名前とホストファミリーの名前が呼ばれ、前に降りていき挨拶をしてそれぞれの家に帰っていく、こういう流れだった。ホームステイがダブルで⑩番だった私はD⑩という呼ばれ方をしていた。シングル数名が先に呼ばれてダブルのペアが次々と呼ばれていく中、とてつもない緊張に襲われた。

みんな笑顔で会って写真をとって帰っていく。あと三人、あと二人、あと一人：

ついに名前が呼ばれた。下に降りて行って前でホストファミリーが降りてくるのを見た。なんと、さっきの家族ではないか。頭の中でいろんなことが交錯して考えていた文章などいうことも出来ずにHei。と名前を述べただけで終わってしまった。まだ救いだっただけは笑顔でいられたことだ。そのまま車まで五人で歩きながら少し会話をした。名前の次に聞かれたのは「Are you hungry?」だった気がする。夜だったので私たちのお腹を気にかけてくれたのだろう。家

に着くと三階の屋根裏部屋に案内された。ベッドとタンスが二つに椅子と机が一つずつ。そして真ん中にはAdi Holzerが描いた可愛いデンマークの絵が掛かっていた。照明も明るく柔らかな光で、なんといっても部屋中に広がるいい香りはこれから学校から帰ってくる度にリラックスさせてくれた。

天井が三角斜めになっている可愛らしい屋根裏を私たちの部屋として貸してくれ、初日から、幸せだなあと実感した。こうしてここから私のホームステイ生活は始まった。

ホストファミリーと過ごす時間は思ったより少なかった。日曜日以外ほぼ一日中学校に行っていたためである。午前は授業、午後はバスに乗って遠くまで観光に行った。唯一休みの日曜日は一日中ホストファミリーと過ごせる。

とにかくLucaは遊ぶことが大好きだった。shyという言葉を知らな
いのではないかと思うくらいfriendlyで、一緒にいると自分の弟にな
ったかのような気分だった。ポケモンカードゲームとMinecraft
とトランプリン、フットボール、クリケット：学校から帰ってくる
と毎日一緒に遊んだ。AnthonyもLucieも一緒に庭中走り回った。

「(スポーツに)言語の違いなんて関係ない」

よく聞く言葉だ。しかし実際オリンピックピックなど見ていて少し納得する部分はある。日本でしか過ごしたことのない私が実体験的に感じた事は今までなかった。でも私はホストファミリーと過ごすことで確信を持った。同じ共通のルールで遊ぶことは言葉の違いなんて関係ない。そもそもそこまでスポーツの最中に言葉を発するわけ

でもないが単にそれだけが理由ではないと思う。嬉しい、悲しい、悔しい、そんな感情は使う言葉が違っていてもみんな感じる。同じ気持ちで喜びあえる、励ましあえる。同じ人間なのだから。

それにみんなで遊び、心を許せたためか、殻を破って下手な英語をさらけ出して、少しずつ日頃の会話も積極的に言いたいことを伝えようとするようになった。

さあしかし、日曜日はもっと庭で遊び回ったのかと言われるとうではない。アウトドア系のこの家族は休み二日も丘に連れていってくれた。どちらの丘も急斜面で石がゴロゴロ転がっていて、普段からの部活で少しは体力をつけていたつもりがハアハアと息を切らさずには登ることができなかった。しかし楽しく手を繋ぎながら、会話をしながら、時にはふざけて水を掛け合いながら登った。登ることは辛かったが頂上からの景色は素晴らしかった。普通の山と違い丘なので遠くまで街並みが綺麗にはっきりと見える。日本とはまるっきり違った。オレンジ色の屋根の家、農場、そして遠くには沢山の丘がみえた。町には空に浮かぶ雲の影が流れて行くのがみえた。綺麗な景色を眼下に、そして隣にイギリスの家族をみて深呼吸をした私はイギリスに来たんだ、そう再実感させられた気分だった。

丘の他にもドッグショーや食事もできる大きなスーパーにも連れて行ってもらった。授業でイギリス人の好きな料理ナンバーワンはタイ料理、またトップテンのなかにイタリアンが入っているということも学んでいた。実際スーパーに並んでいるものを見るとそういった類のものが多かった気がする。私はピッツアを食べたが一ピースの大きさが私の顔と同じくらいあり、それだけでお腹がいっぱいになった。食べ終わった後 Anthony と Lucie がスイーツを食べている間、私たち子供はスーパーの外にある小さい広場に行った。そこは買い物している両親を待っているような小さな遊具などが置いてあった。その日遊具の上には六、七歳くらいの六人ほどの子供

たちがいた。何人ががたまにこちらを見てくるのがわかる。しかし特に気にせず三人で笑いながら歩いて行って遊具の前を通り過ぎた。しかしその時「Japanese rude」という単語が耳に飛び込んできたのだ。Rudeとは「無礼者・粗暴な」と言った意味だ。

はじめ、あまり聞き取ることができなかった私だったが少し離れたところのベンチに三人で座るとLucaが小声でなにか話して遊具の方に行こうとする。きつと「あいつら君たちのことバカにしていた。一言いってやらなきゃ。」といった具合だったのだと思う。友達と必死に止めたが何度も行こうとする。しまいには子供たちの一人の女の子に「コンニチハ」と挨拶された。それがからかったのか普通に挨拶をしてくれたのかは私にはわからない。結局十分経ったのでLucaを引きずってAnthonyとLucieの元に帰った。二人の元に帰ったときLucaが二人に話しているように見えた。でもその状況を私たちがまだ知らないと思ったのか二人はそれには何の返事もせずに黙って聞いただけでその後私たちを連れて別のところに行って買い物始めた。

私は家族の前では普通に振舞っていたが結構ショックだった。涙が出そうになった。そもそも子供に言われたのは心に突き刺さった。例えば政治的に偏見な目で日本を見ている大人などに言われるならまだわかる。しかし今回は半周りくらい年下の子供に言われたのだ。この子たちはどこからそういうイメージがついたのだろう。やっぱり肌の色とか違うと受け入れてもらえないのかな、考えれば考えるほど悔しかった。

でも悔しさが大粒の涙に変わる前にLucaの優しさに気づけて心を落ち着かせることができた。Lucaは八歳にして何カ国も海外に行っている。ホームステイもこれで受け入れは二回目だ。同じくらいの子供でも世界を知っているこの男の子はわかってきている。人種が違って仲良く出来ること。人種が違って分り合えること。

私はイギリスにきて良かった。この家族に巡り会えて良かった。いつも気にかけてくれていつもと違う環境でも過ごしやすいように沢山話しかけて気持ち聞き出そうとしてくれた。はじめからほんとの心の優しい人たちだった。「Are you hungry?」この一言だって優しさの一つだ。

私は別れるとき絶対に泣かないでおこう。最後までふざけあって笑顔でさよならをしようと思った。一生あえなくなるわけじゃないんだ。また再び、という意味でも悲しみより感謝を伝えようと思った。別れの学校についた時にまず荷物点検をする。するとまもなく学校の前にバスが来た。乗り込みの時間がやってきた。晃華生もホストファミリーたちも学校の前の道路にでて最後の言葉を交わす。全員と言つていいほどほとんどの人が泣いていた。でも私はペアの子とLucaにお姫様抱っこをしてあげたりして遊んでいたのでギリギリまでバスに乗れなかった。

しかしいよいよ出発しなくてはいけなくなったのでLucaをつれてまたAnthonyのもとへ帰った。そこでAnthonyとLucaと最初で最後のハグをした。その場であまり多くの事は語れなかったけど最後の夜に渡したカードに記したつもりだった。何度もLucaは体をくっつけてきたり飛び跳ねたりしてきたがもう行かなくては行けない。いつも学校に送ってくれていた時のように「See you later」と言いたかったが「Good-bye」といつて後ろを向くと突然涙が出てきた。あれほど乾ききっていたはずなのに。少し頬を流れるだけでなく次々と涙が溢れてくる。あんなにイギリスに行きたくなかったのにイギ

リスから離れたくなかった。私の初めての海外がイギリスで、そしてホストファミリーが彼らで本当に私は幸せ者だと思った。

泣いている私に気づいたペアが大丈夫かーと声をかけている様子に異変を覚えたのか、バスのステップに足をかけた時にまた「Lucy」が来てくれてハグをしてくれた。「日本でもフットボール練習しつづけてよ、日本にもいくから。」そう声をかけてくれた彼は私の半分の年齢とは思えなかった。

私はこの語学研修が終わるとき、英語で閉会スピーチをした。

「（略） この語学研修は自分を深く見つめる機会になったと思います。必死に、自分の言いたいことを慣れない英語を使って伝えようと思いました。多くの人とコミュニケーションをとりました。そして、言葉の壁を越えて人と人で繋がることのできる嬉しさ、神秘さを実感することができました。ここで得たことを必ず日本に持ち帰って、これからの自分たちの人生に繋げることができそうです。楽しい実りある時間を過ごせたことに感謝します。」

ありがとうございました。」

私は必ず沢山の経験をさせてくれたイギリスに、あの家族にまた会いに行く。